

の繰り返しであった。

カガヤン溪谷は治安が悪い。一時はパトケ三十台も動員したことがあったが、そんなときは、土民の暴動やゲリラの襲撃に備え、護衛兵十数名付けてもらったこともあった。普段は、私と和田上等兵の二人でシビリアンと同じ服装で背に籠を背負い、むぎわら帽をかぶり、素足で歩くが、籠は二重底で下にはいつも二個の手榴弾が入っていた。一番苦しかったのは素足で川原の焼け石の上を歩くことだった。

昭和二十年五月十六日、部隊はバガバックに転進命令が下り、五月十七日ダビックを出発した。そのとき、加藤主計が私を呼んで「お前は傷兵だからここに残れ、そして留守中ゲリラ土民の襲撃に備えよ」と兵八名、銃八挺、米三〇キロ、病人が十五、六名だった。たった八名の兵でゲリラが襲撃してきたら、どうして防ごうかと心細かった。

六月二十五日、オリオン峠の戦いに敗れた友軍が続々とカガヤン溪谷に入ってきて来た。私の部隊も多数の犠牲者を出して帰って来た。ダビックに来てから三カ月、

この間マラリアで兵力は半減し、その上オリオン峠の戦いで我が部隊の兵力は三分の一となった。

部隊はダビックの陣地を捨てて、さらに奥地に入り終戦を迎え、九月十八日ジョネースにおいて武装解除を受けた。

あれから早くも五十年、私も七十五歳になりました。両足不自由となり、思うように仕事ができず、今では家業も家計も伴に任せ、私は運動のため庭の手入れと養鯉と栗林二反歩ばかり栽培して気ままにやっています。

独立電波（堀江）小隊も照空隊も 歩兵として戦う

山形県 東海林 寿雄

私は昭和十八年一月十五日、「防空兵」として大阪集合地に入営し、下関、釜山、朝鮮半島経由、一月二十六日牡丹江馬鞍山にて満州第三六三七部隊（独立野

戦照空第二大隊第一中隊内海隊）に入隊しました。輸送指揮官は中隊長代理磯野中尉で車内では、「シंगाポールの街の朝」を何回となく繰り返し歌ったことが、印象に残っております。内海大尉は千島方面に転属になり塩谷隊となりました。

昭和十九年六月十二日、南方方面転出のため牡丹江掖河駅を発つ。「瑞穂丸」にて七月十六日比島マニラに上陸、マニラ市の防空の任に就く。

昭和十九年六月二十八日、神奈川県相模原にて独立電波小隊（電波四個小隊）が編成され、九月七日マニラ上陸、第四航空軍司令部直属隷下となり、その隷下に各小隊ごとに配属され、第二小隊であった堀江小隊は九月八日威三六三七部隊（野戦照空第二大隊）本部に配属となる。九月二十一日のマニラ初空襲の当日、私はマニラ市郊外にある中隊本部「バルート」の陣地から臨時衛生兵教育のためレトラン大学跡にある大隊本部におり、そのときに堀江小隊と一緒に空爆の中にいたことを後で知る。

堀江小隊は十月に入り、電波兵器が空輸されること

で中隊本部の「バルート」に陣地構築を始める。待ちに待った電波標定機が空輸されて組み立てに入ったが、ブラウン管が機械と合わないことが判明し、作業を中止する羽目となる。二十一年一月七日の転進命令で照空隊と行動を共にする際、完成間近い標定機を取り外して穴の中で焼却する。私は中隊本部におり、テレビのブラウン管の画面に波形だけの映像を見ただけでした。

一月十二日夜、照空隊第一陣として塩谷隊と堀江小隊第二分隊はマニラを出発、北部ルソン「エチアゲ」飛行場に向け転進、無灯火の行軍となる。三月三日「ソラナ」にて照空隊は解散となり、塩谷隊は勤兵団独立歩兵第一八三大隊牟田部隊に、中隊の一部は臨時歩兵第十六大隊利根本部隊へ転属する（照空隊関係から一九八名）。

塩谷隊は三月十二日、目的地北部ルソン「カワヤン」の牟田部隊本部に到着する。三月三十日編成替えがあり、塩谷隊は二分され塩谷第二中隊、早川第三中隊となる。私は早川隊に配属となる。

早川隊の第二小隊長に堀江少尉が任命される。早川隊は四月二日「シノマルノルテ」に到着、附近の警備に就く。五月十八日作命によりオリオン峠入り口付近に転進を命ぜられる。堀江小隊は病兵二十四名と共に「シノマルノルテ」に残置となる。オリオン峠を越え五月三十一日「バカバック」朝日橋付近に到着する。

しかしながら、極度の糧秣不足のため、翌日各分隊より二名小林伍長以下十七名再びオリオン峠を引き返し、「コルドン」にて糧を受領したが、「サンルイス」近くで米軍車両部隊がオリオン峠入口の朝日橋を通過、峠に侵入したとの情報にて、遠くの方で砲声が盛んに聞こえ、各部隊は続々と山を下りてくる。

小林伍長以下中隊復帰は絶望となり、糧を放棄して大隊本部に合流すべく北進を続ける。六月七日「シノマルノルテ」に到着する。幸い、後続隊として残留していた堀江小隊と合流することができ、以後行動を共にすることになる。

そのころ塩谷隊は尚武作命により勳兵团主力に復帰すべく六月十一日「カワヤン」を出発、「シノマルノ

ルテ」を通過、六月十四日未明「リザール」において米軍と真正面に衝突、尖兵中隊だった塩谷隊は中隊長以下全滅的被害を受ける。生存者はスコールを利用し「シノマルノルテ」に脱出する。暗くなるのを待って「カバナツアン」に逃れる。

翌日、観測機と迫撃砲に悩まされたが、陣地を構築、死守を決意するも、夜半になってマガット河の渡河の命を受ける。各部隊我れ先にと行動を起こす(翼・駿・藤沢兵团約一万三千名)。河岸に着くと、川の流れも早く、流される者多数おり、大混乱の状態だった。堀江小隊も対岸に着いたのは半数くらいだった。その後元堀江隊の数名は別行動に入り残ったのは十数名となる。在留邦人も避難しているという通称塩水地に糧を運搬するよう指示を受け、夕刻カラバオ(水牛)に糧を積み、部落を発ち明け方まで帰る作業をする。

塩谷隊が塩造りしているとの情報も入る。七月に入り部隊は転進することになり、各人竹筒に塩の配分を受け、「ポンドック」へ向け山岳地帯に入る。

途中モンバイ峠にて初めてゲリラの攻撃を受ける。

七月二十四日「マヨヤオ」に到達した駿兵団は約四五〇名で戦闘中のところへ、翼兵団（三上師団長）と牟田大隊が到達する。七月三十日には敵は二千名に達し、また米人指揮の迫撃砲を有する数百のゲリラありと記してある。

第一線の翼兵団と交代になり牟田大隊は陣地に着く。前方の山の陣地にいた小林伍長は頭部貫通を受け戦死したと後で聞く。そのころ堀江小隊から同年兵の佐田兵弥君、今田芳次郎君と私の三名は後方の山の監視所に配属され、中腹に壕を掘り監視中、前方の山を機銃掃射していた双発のロッキード機の流れ弾が今田君顔面に命中する。抱き合っていた私は幸い無傷だった。その日の戦闘は迫撃砲と数機による機銃掃射、そして山のところどころに炎が上り今までにない展開を呈していた。

監視所を交代になり本部に戻ると、迫撃砲撃破の五名の斬込隊の編成中だった、堀江小隊より私が選ばれ、五日間の糧秣と一キロ爆雷を渡され、大隊長より「成功を祈る」と激励され出発する。途中監視所によると、

「負け戦のときは置きざりにされるときがある」と助言されたが、そのとおり帰隊したときは、部隊は転進した後で民家にはゲリラが見え隠れする。暗闇にその地の脱出を計り病人で追いつけないで寝ている者を頼りに進む。小川を渡り再び山に入ったころ夜が明ける。しばらく行くと、二十名くらいの中に同年兵の村上房治君がいた。この地点から峠づたいに入ったというので三々五々追いかけているのに出会う。芳賀守雄さんと会う。内村少尉をカラバオに乗せ、二人分の装具を背負っての行動のために大分遅れていた。

大隊本部では別に報告もなく斬込隊は解散する。夜中に銃声が聞こえ自殺者もでる。部隊はマガット河方面を眺望できる地点に出たが、さらに山岳地帯に入っていく。このとき堀江小隊は隊長以下菅原敬治さん、三上喜代志さん、佐田兵弥君と私の五名となる。眼下の平野はある程度地形も分かり、糧秣の確保も容易で、生き延びられる可能性があるとの結論になり、山を下り別行動に入る。カラバオの肉を食しマガット河畔に辿りつく。住民の一行と遭遇、食糧品を奪いジャング

ルに入る。対岸より糧秣を確保すべくイカダを組み、岸につないでおいだが発見され流される。

翌日、ジャングルを出た丘でゲリラの一斉攻撃を受け再びジャングルに逃げ込んだが、佐田君のみ受弾する。八月末ごろマガット河畔を行動中ゲリラに出会い、「ゴーマニラ、ジャパン東京」との合図に終戦を知り投降する。「カバナツアン」米軍大隊本部で日本降伏の新聞を見せられ、バラ線で囲んだ簡単な収容所に入る。各収容所を回ってきた大型自動車に乗せられ、「サンホセ」より列車でマニラへ、九月十日モンテンルバの収容所で正式の捕虜の取扱いを受け、堀江小隊も各人別行動となる。

私の捕虜鑑札番号は「五一J—二三三七二」でした。その後、カルバン収容所で佐藤勇さんと会う。マルキナ労働キャンプそして十二月三十日帰還予定者となり、カルバン第一キャンプで佐藤竹治さん、中村長吉さんと再会する。

昭和二十一年一月六日、米リバティー船でマニラ港出航、一月十五日浦賀に上陸、元横須賀重砲兵学校に

て復員事務、一月十八日比島派遣威一〇六六五部隊除隊となり帰郷しました。

フィリピン方面の戦闘での日本軍・軍属及び一般邦人の戦死者の数は五十二万余名と厚生省発表がありますが、本土からの連絡もとたえ、弾薬、食糧、人員の補給もなく病魔と飢餓に苦しみながら死んでいったのが大多数のように思われます。制海権、制空権のない遠い地域での戦闘は無理で、私たちも歩兵に転属になっても何一つ装備もない名前だけの員数にすぎず、多数の犠牲者がでたことが残念です。戦病死された多くの戦友諸兄の方々のご冥福をお祈りするばかりです。

〔後日譚〕

『十三年ぶりに還ってき日の丸遺族の手に』

昭和三十三年十一月八日、山形駅に勤務中に突然、山形新聞社のジープが駅の出口付近に止まり、記者とカメラマンの方が改札室に入ってきました。何事かあったのかと問いましたところ、わたしの名前を言い出しましたので一瞬驚きました。

記者の方の話では、「県の方で調べたところ、戦死

した森谷久栄さんと同じ部隊だったことが判明した
と、終戦後十年以上も過ぎていたので、ご遺族の家庭
の様子などお聞きしたく御自宅に伺ったところ、山形
駅に勤務しているとのこと勤務先を訪ねました」と
のお話でした。そして、「これを見てください」と取
り出したのは、「祈武運長久」「大和魂」「敢闘精神」
などと、たくさんの寄せ書きのある大きな人絹の「日
の丸の旗」でした。

私は眼前に広げられた、この「日の丸の旗」に身ぶ
るいを感じ、言葉もなく心の引き締まる思いをしまし
た。

この「日の丸の旗」はアメリカ陸軍のフィリピン攻
略作戦に参加した、ジョンソン軍曹が、フィリピンの
ルソン島イザベラ州リザール（マニラ市北東方約三百
二十キロほど離れた地点）で手に入れたもので、いつ
かは返す機会があるかもしれない…と軍曹はその「日
の丸の旗」を持っていましたが、たまたま戦死した父
の日記がアメリカ人の手を経て返ってきたといういき
さつを綴った体験記「アメリカは案外近かった」を載

せたリーダーズダイジェスト誌を見て、早速東京にあ
る同誌の日本支社に「遺族の方を探してください」と
その旗を届けられたそうです。

同誌の日本支社の人たちは『贈る 森谷久栄君』と
あるのを手がかりに、厚生省引揚援護局の名簿をひと
つひとつ調べ、ようやく山形市、内表出身の元陸軍軍
曹森谷久栄さんの遺品であることを確認したとのこと
でした。

記者の方は『戦後十年以上も経っているので、この
「日の丸の旗」をお届けしても家庭の事情によっては、
喜んでくれるどころか、かえって迷惑をかけることに
なる場合があるのでいかながなものでしょうか』と話さ
れました。森谷さんのご遺族の方とは復員直後から私
と芳賀さん共々何回となくお伺いしており、今年はず
うど、久栄さんの十三年忌に当たり六月十四日に法要
を営まれ、私も芳賀さんと招かれ故人のご冥福をお祈
りしたことをお話し、「母親も健在で、またお兄さん
も軍人として出征しており、あるときはフィリピンの
マニラ市で同じ空の下にいたこともあり、家庭的には

非常に喜んでくれることと思います」と伝えました。記者の方から私も一緒に案内してくれるよう頼まれ、早速外出の許可を得てジープに乗り森谷さん宅に向かいました。

森谷さん宅は大きな專業農家で、突然の訪問に驚きと喜びが一緒になって「まるで久栄が帰ったようです」と大いに喜び、ジョンソン軍曹やリーダーズダイジェスト日本社の方々、そして山形新聞社のご好意に感謝申し上げた次第でした。

森谷さんのご家族と近くに嫁がれた久栄さんの妹さんもすぐに駆けつけられ、私も一緒に、佛前にて「日の丸の旗」を囲んでいるところをカメラマンの方が写真を撮りました。翌九日付けの山形新聞には『懐かし武運長久、米軍軍曹の好意実る、ルソンの日の丸十三年ぶり遺族の手に』と佛前で撮った写真と共に大きく掲載されました。

芳賀さんもリザールの戦闘では久栄君と一緒にだったので、記者の方にお話ししましたところ、芳賀さん方にも行かれ、リザールの決戦の様子の記事と顔写真も

同時に掲載となりました。

十三年忌に奇しくも「日の丸の旗」が遺族の手にもどったことに因縁があるように思われ強く印象に残っております。

照空隊は歩兵に転科

玉碎直前にルソン島の戦闘

秋田県 照井 浅之助

私は昭和十四年徴集、徴兵検査では甲種合格であった。身長は低かったが百姓で育ったので、心身共に地金は硬かった。後に届いた「現役兵集合命令書」によると、当時としては珍しい「高射砲兵」くじ番号八番となっていた。この兵種は、昭和十四年ノモンハン事件後に新設されたもので、後には防空兵と改められた。

本来ならば内地の部隊に入営となることを、私は広島西練兵所に、昭和十五年二月二十九日（この年は閏年）、午前九時集合となっていた。雪も寒さも厳し